

第2章 戦間期国際「秩序」構想とN・S・トゥルベツコイのユーラシア主義

浜由樹子

はじめに

ユーラシア主義とは、周知のように、1920年代に一部のロシア亡命知識人から生まれた思想であり、ロシアを「ヨーロッパでもアジアでもないユーラシア」と定義した概念である(Iskhod...1921)。研究会報告では、「ユーラシア主義の始祖」の一人であるニコライ・トゥルベツコイを中心に、彼のユーラシア主義を従来のような思想・哲学研究の枠組の中で論じるのではなく、これを一定の歴史的、地域的条件下に生まれた歴史現象として理解し、1920年代という時代背景、および、彼の亡命先であった中・東欧の状況のもとで評価し、そこに「国民国家」批判としての意義が見出せることを論じた。しかし、これについては既に別の論文に発表しているため(浜 2004)、本稿は「国民国家」批判としてのユーラシア主義、特にその文化論の側面に焦点を絞り、それを同時代のヨーロッパにおける「秩序」構想の中に位置付け、問題提起を行うことを目的とする。

1. トウルベツコイのユーラシア主義

ユーラシア主義の創始者の一人であり、言語学者としても著名なニコライ・トゥルベツコイのユーラシア主義は、西欧文明の「自己中心主義」批判と、民族文化の多様性を主張の軸としていた。トゥルベツコイは、ヨーロッパ人は自らの民族文化を最も優れたものだと考え、それを「普遍的人類文明」とみなす「自己中心主義」を持っていると考える(Trubetskoi 1920; 1921b)。しかし、世界中の民族文化にはそれぞれ等しい価値があり、その多様性こそが重要であるということ、そして、自発的であれ強制的であれ、非ヨーロッパ社会のヨーロッパ化は単一の価値観を押し付けることによってその多様性を破壊することを意味する、という主張が、彼の文化論の基礎となっている(Trubetskoi 1921b; 1923; Letters... 1975: 14-16)。また、民族文化が依拠する「自己認識」が、盲目的な西欧追従などによって歪んでしまった場合、そこには「偽のナショナリズム」が生まれると彼はいう(Trubetskoi 1921a)。それではロシアの自己認識とはどうあるべきなのか、そもそも「ロシアとは何なのか」という問いに対し、トゥルベツコイは文化、ロシア史の問題を通じて答えようとする。

彼の結論は、ロシアとはスラヴとトゥーランが等しく重要なつながりを有する独自の文化圏であり、それ自体の中に多様性を抱える「ユーラシア」である、というものであった(Trubetskoi 1921b; 1927a)。そして、ロシア文化がその多様性を生かし、さらに民衆と政治体制が精神的基礎

を共有するという、彼が理想とする状態は、ピョートル大帝による人為的なヨーロッパ化が行われる以前のモスクワ公国時代に見出されている。この場合ピョートル大帝の政策は、民族文化の破壊と均質化を意味し、民衆と政治体制との乖離をもたらしたと考えられた (Trubetskoi 1925)。

トゥルベツコイ個人の問題意識を通じて検討すると、彼のこの世界観の源は、後にそのライフワークともなるカフカス地域の言語・文化研究に求められる (Lieberman 1990; 1991)。換言すれば、多様な民族が混沌とした様相を呈しながらも調和して共生している「ユーラシア」の原風景がそこにあったのである。また、革命に続く内戦の時期を、カフカス地域を転々として過ごした経験 (Letters...1975: 4) は、「ロマンス・ゲルマン文明の産物である共産主義」はロシアの本質に馴染まない (Trubetskoi 1921c: 552; 1922: 333; 1925: 277) という見解を彼にもたらした。

このような内在的契機を得て形成されたユーラシア主義の文化論は、もう一方においては、彼が身を置いていた戦間期中・東欧の政治・社会状況とも不可分な関係にあった。その最たるものが「偽のナショナリズム」批判であろう。彼の「偽のナショナリズム」の類型には、国内の「他民族」を押しなべて均質化しようとする「戦闘的ショービニズム」や、西欧列強に認められる「国民国家」の一員になることだけを望み、追求するナショナリズムが含まれている (Trubetskoi 1921b)。これは、領土画定と「国民」の同質化によって成し遂げられた西欧「国民国家」形成に対する批判であると同時に、第一次世界大戦後の新興独立諸国が目指した、しかしきわめて複雑な民族分布を有する地域の実情にはそぐわない、西欧をモデルとした「国民国家」化の動きに対する批判でもあった。「国民文化」のイデオロギーにみられるような、文化を政治目的に従属させる傾向に対して彼が批判の矛先を向けていたことから、それを裏づけることができよう (Trubetskoi 1927b)。

さて、このような観点から翻ってロシアについて考察する中でトゥルベツコイは、「特殊な多民族国家」ロシアにとってあるべき文化の姿を「地域的、領域的線に沿って多様化し…顔のない同質性の代わりに地域的色相の虹が現れるべきである」 (Trubetskoi 1927b: 429) と描いた。また、これを導くべきは「ユーラシア」というより大きな総体としての自己認識であり、「ユーラシア諸民族」としての自己認識を重層的に組み合わせることによって、狭量なショービニズムを乗り越えることも、彼は構想していた (Trubetskoi 1927c: 500-502)。つまり、戦間期ヨーロッパという背景のもとでは、彼のユーラシア主義とは、「大ロシア・ナショナリズム」 (山内 1991: 286) や「大国主義」 (堀江 2002: 8) というよりもむしろ、全体を包摂することによって排他的ナショナリズム、さらには「国民国家」のもたらず対立を乗り越えようとする思想、ロシアという多民族地域の在り方を通じて、「国民国家」とそれによって構成される国際「秩序」を問い直す思想であったといえるであろう。

2. 戦間期ヨーロッパにおける国際「秩序」構想

中・東欧の新興独立諸国が「国民国家」形成へと向かう動きの一方で、戦間期のヨーロッパでは、第一次世界大戦の直接的原因ともなった排他的なナショナリズムへの反省もあって、「国民国家」の超克を目指す理念が登場していた。いわゆる「バルカン連邦」や「ドナウ連邦」構想、ブリアンの「欧州合衆国」案やクーデンホーフ・カレルギーの「パン・ヨーロッパ」運動などがその例である。「国民国家」を問い直すという意味では、ユーラシア主義もこれらの理念と軌を一にしていたといえよう。

確かにこれらの諸思想はそれぞれ、空間的広がりはもとより、生まれるまでの経緯も、その動機も異なるものである。

「欧州合衆国」案は、戦争の惨害に苦しみ、植民地諸地域の抵抗と労働者階級からの挑戦に動揺し、「西欧の没落」が喧伝されるヨーロッパにおいて提唱された。それは、大戦の打撃を受け、革命によってロシアという市場を失ったヨーロッパは、アメリカの経済的台頭に対抗するためにも、保護主義の高まりを乗り越えて経済協力を実現しなければならないという主張、また、「協力」という網によって独仏の衝突を防ぐという安全保障上の目的を持って現れた (Salter 1933; ヒーター1994 : 177-206)。

それに対して中・東欧の諸連邦構想は、列強の脅威から地域社会を守り、それに対抗するための措置としてその地域で力を持ったのである。「バルト連邦」「ドナウ連邦」「バルカン連邦」などはいずれも短命ではあったが、新興国が個々に孤立することによってもたらされる不安定性と「大国」の脅威に対する脆弱性を克服するという安全保障構想としての側面と、経済協力としての側面を、それぞれ多かれ少なかれ有していた (Arter 1993; 百瀬 1970)。

発想ならびに経緯におけるこのような差異に加えて、「国民国家」の実態に立脚した「欧州合衆国」案と、「国民国家」形成を当面の課題としていた新興独立諸国の構想が、すべて一様にユーラシア主義と同じ「国民国家」批判であるかといえ、むろん議論の余地は残るが、しかし少なくともこれらの思想・理念は主に二つの点において共通していた。

一つは、「国家」の枠組に対する問題提起である。「欧州合衆国」案が提唱されるまでの前提にあった関税をめぐる交渉も、ロカルノ条約締結に至る国境確定問題も、いわば「国家」の枠組が生み出す対立が原因であった (Salter 1933 ; エリオ 1962 ; ヒーター1994)。このことは、「国家間 [における] 政治的憎悪の経済的および国民的原因」となる国境の「止揚」「打倒」を主張するクーデンホーフ・カレルギーの『パン・ヨーロッパ』において、より明確に表されている (クーデンホーフ・カレルギー1970 : 162-163)。また、民族分布の複雑な中・東欧地域において「一民族一国家」の発想に基づいて「国家」形成を進めることは、いずれの新興独立国家にも少数民族問題をもたらしたが (Janowsky1945; ロスチャイルド 1994)、これらの地域から生まれた連邦構想も、このような「国家」枠組の設定に対する問題提起という側面を持っていたことに留意すべきであろう。

いま一つの共通点は、その「国家」の乗り越え方にある。「国家」や「民族」を厳然と区別し、分割することによって敵意や反目は強まるのであり、その意味では「国家」の属性ともいえる対立とその脅威を、これらの思想は、「排除する」ことによってではなく、全体を包み込むことによって乗り越えようとしていたのである。つまり、西欧においては「歴史的禍根である分裂」（エリオット 1962 : 19) を克服し、中・東欧においては地域社会を分断から守るかたちで地域再編を目指す試みであったといえよう。

3. ユーラシア主義と「秩序」構想の背景

このような思想・構想が現れた背景にあるのは、第一次世界大戦後の国際「秩序」構築である。なかでもとりわけ大きな影響を及ぼしたのは、ウィルソンとレーニンの掲げた「民族自決」であったといえよう（メイア 1983）。戦勝国側は、多民族帝国を内側からの分解させることと、中・東欧諸国の独立に加担することによって、そこに共産主義への「防疫線」を築くことを企図していたが、その一方で、階級対立の克服が民族問題の解決をもたらすという論理に依拠して革命の波及を狙うソ連側は、「民族自決」の原則を植民地地域や西欧諸国内の分離運動に適用することで、資本主義世界からの脅威に対抗しようとする意図をもってこれを語った。まさにこの「民族自決」の大義名分のもとで、戦後の勢力図の塗り替えと地域の再編が行われようとしていたのである。

このような「秩序」構想をめぐる様々な主張の中に、先の統合理念、連邦構想、そしてユーラシア主義を位置付けるとどのようなことがいえるであろうか。

まず、ブリアン等の発想は、あくまで「秩序」を「形成する側」の論理であるということがある。例えば、クーデンホーフ・カレルギーが描いた「パン・ヨーロッパ」の地図は、世界を「パン・ヨーロッパ」、イギリス連邦、「パン・アメリカ」、ロシア連邦、日本を中心とする「極東アジア」という5つの「地域国家」に分けており（クーデンホーフ・カレルギー 1970 : 50-51）、アジア・アフリカの植民地諸地域は「パン・ヨーロッパ」ならびにイギリス連邦にそれぞれ含まれている¹。これは、ロシア（ソ連）への配慮を除けば、明らかに戦勝国の論理に基づくものであって、トゥルベツコイは「パン・ヨーロッパ」のこの点を「あからさまな植民地帝国主義」として批判している（Trubetskoi 1935 : 524）。また、トゥルベツコイの目には、この点においてはソヴィエト・ロシア側も同じ「秩序」を「形成する側」と映っていた。彼は、ヨーロッパ的「自己中心主義」がある限り、仮に社会主義的体制が確立されても、それを画一的なモデルとして他の国々に

¹ クーデンホーフ・カレルギーの「パン・ヨーロッパ」は、イギリスを含まず、バルトと中・東欧の新興国を含む「26の比較的大なる国家と5の小領域より成る」「ポーランドよりポルトガルに至るすべての国家の国家連合」（クーデンホーフ・カレルギー : 55, 63-65）に、それらの国家が領有するアジア・アフリカの植民地が含まれたものとして描かれている。それに対して、ブリアンの「欧州合衆国」は、イギリスを含む27カ国の連合であり、そこに植民地は含まれていない（ヒーター : 204）。この時期の「ヨーロッパ」概念をめぐる議論については、Wilson 1995 : 83-146 を参照。

押し付け、監視することになるであろうことを警告していた (Trubetskoi 1920: 83-85)。

次に、各種の連邦構想は、上のような列強の動きの中で、「秩序」を「形成させられる側」が、地域としていかに列強の干渉と分裂の危機から生き残るかを賭けた対応策であったといえることである。その意味では、トゥルベツコイの議論における「ユーラシア」も、共産主義という「ロマンス・ゲルマン文明の産物」である思想によって人為的に変質させられ、破壊される地域社会なのである。しかし彼は、中・東欧のように特定の言語を軸とした「民族」概念 (Kohn 1965; Seton-Watson 1977) に対しては、批判的であったと思われる。なぜなら、トゥルベツコイの「ユーラシア」イメージは、多様な民族が多言語状態の中で共生している地域にあったからであり、現に彼は、言語中心の民族の争いは、「かつてのオーストリア・ハンガリーに特徴的な」ものであるとして、否定的見解を示している (Trubetskoi 1927c: 433)。中・東欧の動向に対する彼の見解としてより明確なのは、トゥルベツコイが特にそのような「民族」概念に基づいた「一民族一国家」のイデオロギーによる「国家」形成に批判的だったことである。先にも触れたように、彼は「国家を持つ民族」になることを望むだけの「偽のナショナリズム」を非難し、自己認識の欠如した「民族自決」は混乱を招くだけであると述べている (Trubetskoi 1921b: 112-113)。トゥルベツコイにとって、西欧をモデルとした「国民国家」形成は、ヨーロッパ化、すなわち画一化へと続く過程として捉えられていた。しかしながら、ロシアをも含む中・東欧の諸地域においては、多民族帝国の支配下で諸民族が「抑圧されている」と感じていたからこそ独立を志向したのであり、「被抑圧民族」にとって民族解放とは、例えそれが少数民族問題を生じさせる結果になったとしても、独立国家を手に入れることと歴史的に結びついたものだったのである。この点は、トゥルベツコイと独立を望んだ諸民族との間にある、避けがたい対立点であったといえよう。

第一次大戦後の「秩序」形成の文脈に位置付けると、「国家」の枠組に対する問題提起という同じ意味を持つてはいても、「秩序」を「形成する側」である「欧州合衆国」案と、「形成させられる側」が提起した連邦構想やユーラシア主義には必然的な「ずれ」が見出せる。また、「一民族一言語一国家」のイデオロギーに固執してしまった中・東欧の構想と、曖昧・混沌とした多民族状態を想定したユーラシア主義では、「民族」「国家」をめぐる概念、及び現実への対処において決定的な不一致が存在したものの、「秩序」を「形成させられる側」の論理を代弁しているという意味では、両者の間には共有されるものが多かった。

おわりに —ユーラシア主義の持つ意味：地域から国際関係へ

ユーラシア主義は概ね、スラヴ主義の流れを組む一思想としてロシア思想史の範疇で論じられる。もしも、従来の思想・哲学研究が行ってきたように、「国家」あるいは「民族」をアプリオリなものと想定し、思想をその枠の中に固定して抽象的に論じるだけであれば、ユーラシア主義は「ロシアはヨーロッパかアジアか」という問いに対する回答の一つに過ぎないであろう。しかし、

ユーラシア主義の歴史的な意味は、「国家」や「民族」を相対化せざるを得ない国際関係史の文脈の中におくことで初めて理解できるのではないか。

トゥルベツコイのユーラシア主義が展開された 1920 年代とは、1930 年代の激動へと向かう過渡期として位置付けられると同時に、ユーラシア主義者たちがいみじくも「地殻変動」と呼んだように (Iskhod...1921 : iii)、新たな「秩序」の構築や地域再編の試みの中に、様々な思想潮流が生まれた時代でもある。このような時代背景の下で評価すると、トゥルベツコイのユーラシア主義は、「ユーラシア」としてのロシアの新たな自己認識を示したというだけに留まらず、従来のロシア知識人の思考枠を遥かに超え、戦間期という時代を「国家」や「民族」の歴史とは別の角度から照射した思想であったともいえよう。それはまさに、ロシアとヨーロッパの狭間から生まれ、「国家」から離れた亡命者の視点から地域の在り方を問い、さらには地域の視点から「国民国家」ひいては近代国際関係そのものを問い直す思想としての意味を持つのである。

<参考文献>

外国語文献

- Arter, D. (1993) *The Politics of European Integration in the Twentieth Century*, Aldershot: Dartmouth.
- Iskhod k Vostoku, predchivstviia i sversheniia, utverzhenie evraziitsev* (1921), Sofia: Rossiisko-Bolgarskoe knigoizdatel' stvo.
- Janowsky, O. (1945) *Nationalities and National Minorities with Special Reference to East-Central Europe*, New York: Macmillan.
- Kohn, H. (1965) *Nationalism, Its Meaning and History*, rev. ed., Princeton: D. Van Nostrand Company.
- Liberman, A. (1990) "Trubetzkoy as a Literary Scholar," in Nikolai S. Trubetzkoy, *Writings on Literature*, ed. and trans. by Anatoly Liberman, *Theory and History of Literature*, Vol. 72, Minneapolis: University of Minnesota Press, pp. x i - x lvi.
- Liberman, A. (1991) "N. S. Trubetzkoy and His Works on History and Politics," in Nikolai S. Trubetzkoy, *The Legacy of Genghis Khan*, ed. by Anatoly Liberman, Ann Arbor: Michigan Slavic Publications, pp. 295-375.
- N. S. Trubetzkoy's Letters and Notes* (1975), Prepared for publication by Roman Jakobson with the assistance of H. Baran, O. Ronen and Martha Taylor, Hague: Mouton.
- Salter, A. (1933) *The United States of Europe and Other Papers*, London: George Allen and Unwin Ltd.
- Seton-Watson, H. (1977) *Nations and States, An Enquiry into the Origins of Nations and the Politics of Nationalism*, London: Methuen.
- Trubetskoi, N. S. (1920) *Evropa i chelovechestvo*, Sofia: Rossiisko-Bolgarskoe knigoizdatel' stvo (Reprinted in *Nasledie Chingiskhana*, Moscow: Agraf, 2000, pp. 29-90).

- Trubetskoi, N. S. (1921a) “Ob istinnom i lozhnom natsionalizme,” in *Iskhod k Vostoku*, pp. 71-85 (Reprinted in *Nasledie*, pp. 103-117).
- Trubetskoi, N. S. (1921b) “Verkhi i nizy russkoi kul’ tury, etnicheskaiia osnova russkoi kul’ tury,” in *Iskhod k Vostoku*, pp. 86-103 (Reprinted in *Nasledie* pp. 118-135).
- Trubetskoi, N. S. (1921c) “Predislovie k Knige G. Uellsa ‘Rossiia v Mgle’ ,” Sofia: Rossiisko-Bolgarskoe knigoizdatel’ stvo, pp. iii-x vi (Reprinted in *Nasledie*, pp. 543-552).
- Trubetskoi, N. S. (1922) “Russkaia Probleme,” *Na Putiakh*, No. 2, pp. 294-316 (Reprinted in *Naledie* pp. 328-342).
- Trubetskoi, N. S. (1923) “Vavilonskaia bashnia i smeshenie iazykov,” *Evraziiskii vremennik*, No. 3, pp. 107-124 (Reprinted in *Nasledie*, pp. 367-381).
- Trubetskoi, N. S. (1925) *Nasledie Chingiskhana, vzgliad na russkuiu istoriiu ne s Zapada, a s Vostoka*, Berlin: Evraziiskoe knigoizdatel’ stvo (Reprinted in *Nasledie*, pp. 223-292).
- Trubetskoi, N. S. (1927a) *K probleme russkovo samopoznaniia*, Paris: Evraziiskoe knigoizdate’ stvo (Reprinted in *Nasledie*, pp. 93-219).
- Trubetskoi, N. S. (1927b) “K ukrainskoi probleme,” *Evraziiskii vremennik*, No. 5, pp. 165-184 (Reprinted in *Nasledie*, pp. 412-434).
- Trubetskoi, N. S. (1927c) “Obshcheevraziiskii natsionalizm,” *Evraziiskaia khronika*, No. 9, pp. 24-30 (Reprinted in *Nasledie*, pp. 493-505).
- Trubetskoi, N. S. (1935) “Ob idee-pravitel’ nitse ideokraticeskovo gosudarstva,” *Evraziiskaia khronika*, No. 11, 1935, pp. 29-37 (Reprinted in *Nasledie*, pp. 518-525).
- Wilson, K. and Van der Dussen eds. (1995), *The History of the Idea of Europe*, London: Routledge.

邦語文献

- エドワール・エリオ (1962) , 鹿島守之助訳 『ヨーロッパ合衆国』 鹿島研究所.
- リヒャルト・クーデンホーフ・カレルギー (1970) , 鹿島守之助訳 『クーデンホーフ・カレルギー全集』 第1巻、鹿島研究所出版会 (Richard Coudenhove Kalergi, *Panuropa*, 1923) .
- 浜由樹子 (2004) , 「N・S・トゥルベツコイのユーラシア主義—『国民国家』批判の視点に注目して」『スラヴ研究』第51号 (掲載予定) .
- デレック・ヒーター (1994) , 田中俊郎監訳 『統一ヨーロッパへの道』 岩波書店.
- 堀江則雄 (2002) , 「ユーラシア主義の系譜とプーチン」『ユーラシア研究』第27号、8-13頁.
- A・J・メリア (1983), 斉藤孝・木畑洋一訳『ウィルソン対レーニン—新外交の政治的起源 1917-1918年—』全2巻、岩波現代選書.
- 百瀬宏 (1970) 「ヴェルサイユ体制とヨーロッパ『諸小国』—東欧とその国際環境を中心に」『岩波講座 世界歴史』第26巻、現代3, 岩波書店, 204-247頁.

山内昌之 (1991) 『ラディカル・ヒストリー—ロシア史とイスラム史のフロンティア—』中公新書.
ジョセフ・ロスチャイルド (1994) 大津留厚監訳『大戦間期の東欧—民族国家の幻影—』刀水書房.